

ゆくはし 記念病院のひろば

2018年12月号



一般内科医が認知症診療と出会って得たもの

医療法人のぐちクリニク

理事長 野口隆義 先生



平成二十二年の「認知症サポート医」の研修参加が、私と認知症との出会いでした。研修は認知症の病型や症状、治療といった医学的なものとサポート医としての今後の活動でした。次第に増え続ける認知症診療を専門医だけではこなせない現状から、それぞれの地域で一般内科医がどう関わっていくかという難題を突き付けられたのです。そのような中で、平成二十四年から内科医と脳外科医、精神科医、本村先生のような神経内科専門医とで京都医師会認知症治療勉強会を立ち上げました。

内科にかかっていた患者が次々と認知症になっていく中、初期診断だけではなく、治療も内科医で行うようになってきました。専門医には徘徊などの周辺症状（BPSD）の治療をお願いするという約束事（仕事の凄み分け）ができてきました。認知症患者の各病型、個別の症状への投薬の工夫、周辺症状への漢方薬や一部の抗精神病薬の投与方法なども学びました。また、認知機能障害が出現しやすい薬（利尿剤や抗コリン剤）への使用注意などを学びました。

また、平成二十六年に認知症専門看護師が行った認知症患者からみた周辺症状の行動理由をさぐる講演は衝撃的でした。認知症患者も感情はよく保たれ、何をしたいかと徘徊するのかを考えると自ずと認知症の他の側面を理解できるといふものでした。

医師会員による認知症診療と並んで、行政が行う認知症啓発活動が行われるようになりました。住民同士での見守り活動や住民参加型事業で認知症患者の発掘が始まりました。そこで、かかりつけ医のいない認知症患者の早期発見の事業が始まりました。医師や医療・福祉・介護だけでなく住民みんなで認知症を診る（看る）ことが実現されようとしています。



行橋記念病院 外来診療ご案内 0930-25-2000(予約制)

		月	火	水	木	金	土
精神科	再診 (予約制 午前・午後)	森 外園 執行 正倫 満 怜児	(副田 秀二) 大澤 眞一郎 一甲 則男	森 執行 正倫 満	中島 康裕 中野 勝文	中野 勝文 (AM) 外園 怜児	(執行正倫) (アルコール) 外園 怜児 一甲 則男
	初診 (予約制 午前)	一甲 則男 中島 康裕	外園 怜児 中島 康裕	大澤 眞一郎 中島 康裕	森 満 中島 康裕	執行 正倫 中野 勝文 (PM)	※診療時間外の受診については お電話でご相談ください。
神経内科	初診・再診		本村 暁			本村 暁 (AM)	

※当院は『初診・再診ともに予約制となっております』

診察をご希望される方はまずはお電話でご相談下さい。



福岡県認知症医療センターでは認知症の医療や介護などに携わる機関の関係者などと定期的（2回/年）に連絡協議会を開催し、関係機関との円滑な連携に向けた情報共有や協議を行っています。本年度、第1回目の連携協議会は各関係機関の皆様をお招きし、二〇一八年十月十八日に行いました。その中で「高齢者虐待」をテーマに各機関から情報提供して頂き、京築における実態を把握・情報共有致しました。全国的にも悲惨な事故・事件へと発展するケースもある高齢者虐待は見逃ごせない問題であると感じています。高齢者世帯・核家族が進む現代において、各関係機関が連携し問題が大きくなる前に支援できることが重要であると感じています。今回の連携会で情報共有した事の意義は大きいのではないのでしょうか。

また、連携会の後に国立医療法人 大牟田病院名誉院長の藤井直樹先生を講師にお招きし「MCI（軽度認知症）」についてご講演頂きました。MCIについて長年培ったデータからの見解を分かり易くご教授頂きました。教科書や参考書だけでは理解しにくい事象も実際の臨床データから検討することでみていくことが多かったと思います。今後も認知症に関する色々な研修を企画して参りますので是非ご参加下さい。

福岡県認知症医療センター

統括マネージャー 認知症看護認定看護師 深津 紘一

平成30年度 第1回
福岡県認知症医療センター
地域医療連携協議会
月例勉強会 合同会



地域医療連携協議会



月例勉強会
講師：国立医療法人
大牟田病院 名誉院長
藤井 直樹 先生
「MCIについて」

本の時間

、二十一時五十分、ミラノ・リナーテ発。勝手のわからないトリエステへのひとり旅にしては非常識なおそろい空の便だったが、この町のためにまる一日を確保するには、これしかなかった、

懐かしい、未知の風景

「トリエステの坂道」

須賀敦子（新潮文庫）

没後二十年。何度目かの須賀敦子さんブームである。一九九〇年、「ミラノ、霧の風景」でデビューし、十年ほどの短い作家生活の中で多くの作品を残した須賀さん。「トリエステの坂道」を手にとった私は、乾いた、それでいて心の奥にまで這入りこむような、文章の虜になった多くの読者の中のひとりである。

まず特徴的なのは、かぎ括弧のない会話体。これは登場人物の会話を聞かされるのではなく、直接に話しかけられたように感じさせる。すなわち読み手を、第三者の立場から突然、その場面に呼び込む。その結果、情景が彷彿としてくるのである。また頻用される体言止めは、読者を作品の空間に投げ出し、余韻を残す。

「トリエステの坂道」は亡夫の愛した詩人ウンベルト・サバの足跡をめぐる、いわば感傷旅行である。次の一文を引いてみよう。

、軽く目を閉じさえすれば、それはそのまま、むかし母の袖につかまって降りた神戸の坂道だった。母の下駄の音と、爪先に力を入れて歩いていた靴の感覚。西洋館のかげから、はずむように視界に飛び込んできた青い海の切れはし、

幼い日に連れられた街の思い出であり、時空をこえた紀行と回想の文は、そのまま、ひとりひとりの読者を今と異なる場所と時に誘う。それぞれの、長い「記憶の坂道」をも思い出させるであろう。なんともいえない既視感が、懐かしい本となって、私たちの前にある。

行ったこともない街である。精神科医にとっては医療革新の象徴のような都市であるらしい。ただ私にとってのトリエステは、国際学会の隣の席で軒をかいて眠っていた、カルロという名の、イタリア人医師の記憶の中にある。

も

編集後記

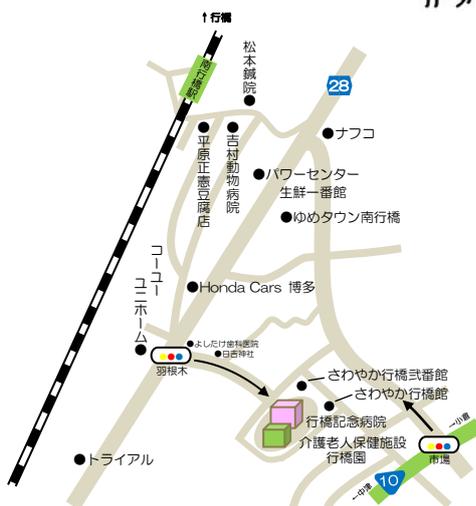
寒い日が続きますが、みなさまいかがお過ごしでしょうか？

入職3年目となり、現在は認知症治療病棟の専従精神保健福祉士として働いています。患者さんが住み慣れた地域で生活を送れるように、多職種チームで一丸となり、退院に向けた取り組みに日々奮闘中です。精神保健福祉士として、専門性をより高められるよう日々努力していきたいと思っております。

これからも地域の関係機関の皆さまとの連携を密にしながら、退院される患者さんやご家族に寄り添った退院支援を心掛けていきたいと思っています。

地域生活支援室 精神保健福祉士 森本 璃那

アクセス



医療法人社団
翠会

ゆくはし記念病院のひろば
発行日 平成30年12月13日
発行所 行橋記念病院
(発行人 一甲 則男)
次回発行 平成30年2月18日

「ゆくはし記念病院のひろば」は
行橋記念病院のホームページで
閲覧できます。

<http://www.yukuhashi-hp.or.jp>